

## ブルターニュの光と風 画家たちを魅了したフランス<辺境の地>

SOMPO 美術館(西新宿) 23.03.25~06.11

フランス北西部の「ブルターニュ」は、豊かな自然と独自の文化を持つことから19世紀のフランスにおいては、「内なる異世界」として捉えられていた。

この地の深緑の海や険しい断崖、平原と深い森が織りなす景観、そして人々の慎ましい生活と敬虔な信仰心は、多くの画家の関心を引きつけている。

その例として「ポール・ゴーギャン」やその影響を受けた「ポン＝タヴァン派の画家」(19世紀後半から20世紀初頭にかけて、フランス・ブルターニュのポン＝タヴァンで活動した芸術家たちのグループ)を挙げることができる。

本展は、フランス随一のブルターニュ絵画コレクションを誇る「カンペール美術館」の所蔵作品を中心に、45作家の「約70点」の油彩画、版画、素描を全3章構成で展示し、ブルターニュの歴史や風景、風俗に光を当てている。

1. 画家が捉えたブルターニュの歴史・風景・風俗
2. サロンにおけるブルターニュ絵画の流行
3. ポン＝タヴァン派やナビ派

尚、1867年に開館した「カンペール美術館」は、15世紀から近代までの絵画1200点やデッサン2000点のコレクションを有していて、特に「ポン＝タヴァン派」の作品を数多く所蔵していることで名高い。



アルフレッド・ギュ 《さらば!》



アドルフ・ルルー 《ブルターニュの婚礼》



リュシアン・シモン

《じゃがいもの収穫》

1907年

何れも「カンペール美術館」所蔵作品